

# 老いる都市

④

日本経済新聞

平成21年2月20日(金)

必要になる。

道路の陥没事故は、下水管によるものが圧倒的に多い。管が詰まったりたるんだりすると硫化水素ガスがたまり、コンクリートを溶かしてしまふ。この状態が続けば下水管に穴があき、周囲の土



陥没した道路にダンプカーがはまる事故も起きている

総延長は〇六年度に四十万キロを突破するなど年々伸びている。しかし、自治体が下水管の維持管理や修繕に費やすお金は横ばいから微減にとどまる。

自治体の元幹部は「財政が厳しいと、つい維持補修費を削りがち」と明かす。首長や議員にとって、普及率を向上させれば自分の手柄になるが、維持補修費を

## 道路吸い込まむ下水管

借金残高一兆一千億円。全国の地方公営企業で、東京都の下水道に次ぎ二番目に借金が多い横浜市は下水道事業。普及率はほぼ一〇〇%を達成し、借金の返済を急ぎたいところだが、実はこれから出費がかさむ。

二〇一三年ごろから、下水管の耐用年数とされる敷設後五十年を過ぎた老朽管が急増するためだ。

### 敷設150年で現役

古いものは横浜港開港時に敷設されたというから、すでに百五十年たつ。下水

砂が吸い込まれて空洞ができる。そこへ車両の重みが加わると、陥没事故につながる。

〇九年度予算の八倍を超え、建設改良費の合計(四百三十四億円)と比べても、二十年後には三倍のお金が

必要になる。道路の陥没事故は、下水管によるものが圧倒的に多い。管が詰まったりたるんだりすると硫化水素ガスがたまり、コンクリートを溶かしてしまふ。この状態が続けば下水管に穴があき、周囲の土

砂が吸い込まれて空洞ができる。そこへ車両の重みが加わると、陥没事故につながる。そこで横浜市は、下水管の詰まりやたるみを早期に発見し、耐用年数を一・五

## 突然の落とし穴 年4700カ所

ば、もっと早い時期に更新す。満足にできない時代が来る。

### 更新投資でさげす

すでに更新どころではない自治体もある。財政の危機度合いを示す連結実質赤字比率が〇七年度で一七・六%となり、県庁所在地では唯一、地方財政健全化法の「イエローカード」にあたる早期健全化基準を上回った和歌山市。下水道会計が百十億円の資金不足を抱え、足を引っ張った。

〇八年一月に下水道料金を四割弱値上げしたことなどから、〇八年度は何とか単年度ベースで黒字に転換できる見込み。その代わり、更新投資や維持補修費はほとんど予算に計上していな

い。敷設後五十年を超える古い下水管もあるが、下水道

総務課の雑賀康先課長は「累積赤字を解消するまで

は、投資を抑制するしかない」と話す。和歌山市の場合、四世帯に一世帯は、下水管が敷かれているのについでない。当面は接続率向上などの増収と、支出の切りつめに注力せざるを得ない。だが、事故でも起きれば、結局は高くつく。人の高齢化とインフラの老朽化。都市はこれまで経験したことがない二つの問題への回答を迫られる。

〓おわり

この連載は磯道真、鈴木禎央、浅山章、伊藤政光が担当しました。

# 東京

